記録＝記憶化される炭鉱

NHKアーカイブス学術利用トライアル研究から

甲南女子大学　木村至聖
shisei2@gmail.com
@SAmC研究会（2013.7.13）

自己紹介

- 木村至聖（きむらしせい）
- 甲南女子大学人間科学部講師
- 文化社会学（文化遺産の社会学・記憶の社会学）、地域社会学（旧産炭地域）
- 過去の記憶や記録、遺物の意味づけをめぐるポリティクス、可能性の研究

『ポピュラー文化ミュージアム』の感想

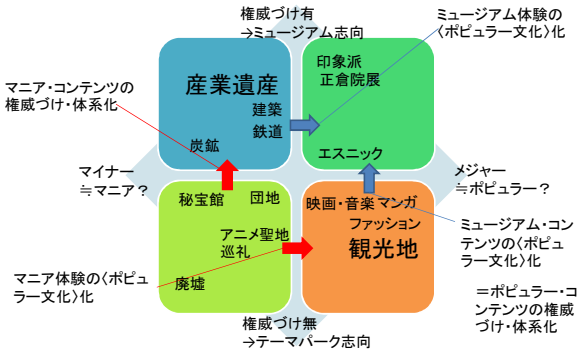
- 「ポピュラー文化」がテーマではあるが、ハコモノ以外、ミュージアム「的」なものも含めており、総括的なミュージアム論になっている
- 「文化の収集・共有・消費をめぐる〈闘争の現場〉」（vii）としてミュージアムを位置づけ、多彩なケーススタディを提示

ただし気になる点1）2）

- 1）ミュージアムの置かれた（地域的、歴史的）文脈への言及が不十分
- →ミュージアムの今後（持続可能性など）を考える上でも不可欠な要素であるはず

- 2）ジャンル分けの粗さ…とくに「マニア文化関連」
- →「「ポピュラー」概念の政治学を視野に入れ、文化の序列化やカテゴリー化の力学のなかで配置し再配置される〈闘争の現場〉として「ポピュラー文化」を考えていく」（vi）ためには、マニア文化の位置づけをもう少し丁寧にする必要があるのでは？

2）「ポピュラー文化」考察のための2軸



私のこれまでの研究テーマ

- 『ポピュラー文化ミュージアム』では、コラム6「軍艦島――廃墟or産業遺産?」を担当
- 主な研究業績
- 2011,「文化遺産と記憶の社会学――旧産炭地域における産業遺産の保存と活用をめぐって」（博士論文）.
- 2009,「産業遺産の表象と地域社会の変容」『社会学評論』60(3): 415-32.
- 2007,「文化遺産イデオロギーの批判的検討――近代西欧の廃墟へのまなざしを手がかりに」『ソシオロジ』51(3): 3-19.

なぜ炭鉱なのか？

- もともと「軍艦島」にも「炭鉱」にも縁もゆかりもなく、「マニア」であったつもりもない
- 当初の研究関心：なぜ「軍艦島を世界遺産に」などという大胆な発想が生まれ、それが誰に支持され、今日のように現実化してきたのか？
- 軍艦島（or炭鉱）はまさに、1）ミュージアムの置かれた地域・歴史的な文脈、2）ポピュラリティと権威をめぐる文化闘争、を考える上で非常に重要な対象
- →『ポピュラー文化ミュージアム』コラムと本日の報告に通底するポイント

地域・歴史的文脈

- いかに厳しい環境であろうとも（山間部や島嶼部）、エネルギー源である石炭を採取しようという近代社会（国家）の執念
- →地域社会（インフラ、組織、人間関係、制度…）が根本的に改変（創造）される
- ⇔石炭産業撤退による急激な危機

軍艦島の例

9

高島の例

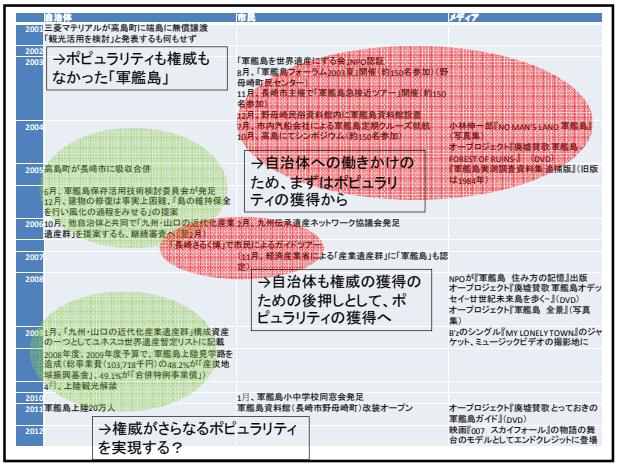
- 1986年閉山の高島炭鉱があった
- 炭鉱最盛期は人口2万人以上
- →現在は451人（2013.4現在）

1996年頃炭鉱住宅が立ち並ぶ様子（左、島内説明パネル）、ほぼ同じ方角を写した現在の写真（右）

10

地域・歴史的文脈

- 地域経済的事情…急激な衰退、産業がない
- プライド・承認に関わる事情…「衰退産業」のレッテル、「筑豊」・「夕張」の強すぎるインパクト（暗いイメージ）
- →権威の獲得によるプライドの回復、ポピュラリティの獲得による社会的承認へ…「世界遺産」という選択肢



ポピュラリティと権威の獲得へ

- 2003年頃、木村は写真集でこの島の存在を知る
- →2007年から調査、同年8月には（隣の）高島に一か月滞在し、軍艦島ツアーガイドに密着
- 当時は、「高島」住民による少人数ガイドツアー（上陸禁止時）

13

ポピュラリティと権威の獲得へ

- 2009年4月より、上陸観光ツアー解禁
- 5社によるツアー

2009年4月21日『毎日新聞』1面より

14

ポピュラリティと権威

- 2009年、「九州・山口の近代化産業遺産群」の構成資産の一つとして、世界遺産暫定リストに記載
- 九州・山口以外の釜石なども参加したため、2013年に「日本の近代化遺産群」に名称変更
- ここから洩れた田川市などは、文化庁を通さずに申請できる「世界記憶遺産」として「山本作兵衛の炭鉱記録画」を提出し、国内登録第一号に
- …近代の記録資料の保存への関心も高まる
- →「文化」をめぐる交渉、折衝、闘争

現在の研究関心

- 炭鉱は近代社会の縮図であり、文化をめぐる闘争の現場である
- →ここまでが博士論文の研究テーマ

- ここ数年は…
- 炭鉱への様々な意味の対立を、フラットに扱ってしまうことへの疑問…調停不可能
- →事実や記録に立脚した議論の必要性

現在の研究関心

- 産炭地研究会（JAFCOF※）の文化社会学要員として、元炭鉱労働者への生活史聞き取りや、海外の炭鉱関連ミュージアム、アーカイブ視察に参加
- ※昨年度の日本社会学会では研究会メンバーが炭鉱をテーマに2部会で11報告のセッション
- NHKアーカイブスを利用した研究　←今回の報告

- 以上を通して、過去の記憶や記録、遺物の意味づけをめぐるポリティクス、可能性の研究を進めている

炭鉱とミュージアム、アーカイブ

- 海外に目を転じると、「炭鉱」は決して「マニア文化」にとどまらず、ローカル／グローバルな文脈で、ポピュラリティと権威を得つつある
- →世界遺産やアートプロジェクト
- 国内でも…

- 20世紀の社会・文化を論じる上での「共通言語」としての炭鉱

ツォルフェアアイン炭鉱業遺産群
（ドイツ、2001年世界遺産登録）

19

フェルクリンゲン製鉄所
（ドイツ、1994年世界遺産登録）

20

ブレナヴォンの産業景観
（イギリス、2000年世界遺産登録）

21

ルール地方産業観光マップ

ドイツ鉱山博物館（ボフム）

国立炭鉱博物館（イングランド）

夕張市石炭博物館

田川市石炭・歴史博物館

宮若市石炭記念館

みろく沢炭砿資料館

池島炭鉱さるく

幌内炭鉱景観公園

九州大学附属図書館付設記録資料館(旧石炭研)

South Wales Coalfield Collection / Miners' Library（ウェールズ）

32